

『神仙伝』再検討のために

—— 諸本における仙伝の配列から見ても ——

亀田 勝見

一

晋の神仙思想家葛洪の名を冠する書物は多数存在するが、そのほとんどは後世の偽作であると言われる。彼の神仙思想を伺うための資料として、第一に挙げるべきは『抱朴子』である。これ以外では、葛洪が著したことが確実な書物の一つとして、『抱朴子』外篇自叙に言及されている『神仙伝』が挙げられる。

現在、『神仙伝』には大別して三種の版本が存在する。一つは題目のみで内容をほとんど伴わない『說字』所収本（以下「說字本」）、一つは最も通行している『広漢魏叢書』所収本（以下「漢魏本」）、そしてもう一つは、最近まで見ることでできなかった『四庫全書』所収の毛晋刊本（以下「四庫本」）である。現存する『神仙伝』が葛洪の原著か、或いはそれに限りなく近いものであつたならば、彼の神仙思想を考える上で大いに有用であろう。しかし、漢魏本については、福井康順氏の研究においてその資料的価値が疑われている¹⁾。これに対し、何人

かの研究者は、漢魏本の内容や説字本の配列を検討した結果、ある程度の価値を認めるべきであるとする。ただいずれの研究においても、四庫本についての詳細な検討は今のところなされていない⁽²⁾。

そこで本稿では、四庫本を見ることのできる今、改めて三種の『神仙伝』について、各時代の類書等をも交えた比較対照を行い、その差異及びそれぞれの性格を検討したい。これにより、たとえ葛洪の著した『神仙伝』まで遡ることのできない、後世の輯本であつたとしても、それらの諸本に何らかの資料的価値を見出すことができるであろう。紙数が限られているため、ここでは三種の『神仙伝』に並べられた神仙の配列に的を絞って検討を進め、上記の目的を一部分なりとも達成していこうとするものである⁽³⁾。

二

以前、下見隆雄氏が漢魏本の配列を基準にして詳細な対照表を作成しているが、次々頁よりの一覧表は、それを大いに参考にしつつ、四庫本の配列を基準として新たに作成したものである⁽⁴⁾。以下、この表をもとにして論じていく。

まず、四庫本の配列そのものについて、内容をも交えて論じたい。

四庫本の配列にはある一定の秩序が見られる。例えば、巻一には彭祖・白石生・黄山君が並ぶ。本文を見ると、白石生は彭祖と問答しており、黄山君は彭祖の術を学び、『彭祖経』なる書を得て地仙となっている。つまり彭

祖一派とでも言うべき仙人たちがまとめられている。これが漢魏本になるとそれぞれ巻一、巻二、巻一〇とばらばらである。

また、巻四の冒頭は墨子であるが、そこでは彼が『五行記』を著し、地仙となったことが記される。次に並ぶ劉政は『墨子五行記』を学び、次の孫博も「墨子之術」を学んでいる。さらに、玉子は「五行之意」にくわしく、天門子の伝では、「其経曰」として「純木之精」「純金之精」など、五行思想に基づいた文が引かれる。九靈子・太陽子・太陽女は「五行之道」に詳しく、太陰女と太玄女は「玉子之道」を修めている。つまり、巻四は概ね墨子に関連した仙人をまとめた巻であると言える。これに対し漢魏本では、先ほどの仙人たちは巻七・巻八・巻一〇に分けて載せられ、太陽女と太陰女は見えない。

巻八の冒頭は葛玄と左慈である。漢魏本では、葛玄は巻七の末尾、左慈は巻五の七人中五番目に位置する。葛洪が左慈・葛玄と受け継がれた仙道を受け継いだ人物であることから考えて、二人が『神仙伝』の中の、いかにも重要視されていないがごとき位置に載せられているのは不自然である。葛洪が記した書物としては、一つの巻の冒頭に、かつ二人を並べて配置する方がより自然であろう。

漢魏本の配列に見える問題点について付記しておく。漢魏本巻七西河少女伝は、同巻二の伯山甫伝とほぼ同じ内容である。巻七麻姑伝も、巻二王遠伝の一部に過ぎない。また、巻一〇黄山君伝は、巻一彭祖伝の末尾と同文である。これらの伝は、系統立てて記されるはずの原著であれば、その仙人についての別の事跡を記した文でない限りは、ありえない重複である。漢魏本の配列については、大いに問題があると言えよう。

以上のような点から、四庫本は漢魏本に比べ、その配列が系統立てて行われており、十分な配慮のもとに構成

- 6 仙苑編珠については、巻数、聯番号、聯内の順番を順に記す。例えば「1/50b」は巻上の第50聯後半であることを示す。()に入っているものは『神仙伝』からの引用でないことを示す。
- 7 太平広記については、漢数字で巻数を、半角数字で『神仙伝』の引用箇での順を記す。その際、()に入っているものは、『神仙伝』からの引用でないものをもその中に含める。
- 8 書名について、「群仙録」は『三洞群仙録』、「神仙通鑑」は『歷世神仙体道通鑑』を表す。
- 9 神仙通鑑については、『神仙伝』からの引用とは記されていないが、参考として掲げる。
- 10 その他については、『神仙伝』からの引用ではないが内容の共通するものを[]で記す。
また、四庫本の内容と全く同じであるものには頭に「=」の記号を冠する。
- 11 後漢書については、中華書局標点本の巻数に従った。

太平広記	太平御覧	群仙録	神仙通鑑	その他	
一2		7	2	文選22	1
		7	4	文選16, 28、[淮南子道応、論衡道處]。珠囊は「若士」	2
	662		4		3
二3	43, 720, 985	18	3	通鑑は「籙經」	4
七14	51	14	4	漢魏本、広記、群仙録は「白石先生」、御覧は「白生」	5
			12	初学記は「黃石君」	6
四5	724		34		7
七15	674, 902, 989	8	5	[太上靈宝五符序卷中]。說字本、漢魏本、書鈔、群仙録は「黃初平」	8
九29			12	漢魏本、広記は「呂文敏」	9
九30			5		10
			5	[太上靈宝五符序卷上]	11
			34		12
四6	669他3条	3, 5	7	文選21(2), 28, 58、水経注19	13
二4		12	13		14
五12	662他6条		4	初学記25	15
五13	662		12		16
七19	500	12	10	毛本と御覧以外は「李八百」	17
七20	345, 827	12	15		18
七16	605他12条		5	七籤85は「王方平」	19
七17		16			20
五7		16			21
五8		14	5	編珠は「婁政」	22
五9	717, 767	16	5	群仙録は「孫傳」	23
六一63	605		5		24
五11			10	編珠は「章震」	25
五10			5	說字本、通鑑は「王剛」	26
			5	漢魏本、通鑑は「皇化」	27
			5	漢魏本、通鑑は「陰恒」	28
			5	漢魏本、通鑑は「李修」	29
			10	漢魏本、通鑑は「離明」	30
					31
				編珠は「盧金」	32
(五九57) 女仙伝				編珠は「項和」	33
	719, 931	15	5	漢魏本、通鑑は「柳融」	34
	394	12	5	漢魏本、編珠、通鑑は「葛越」	35
七18	985		13		36
八22	49, 606, 662		13		37
一一38	699他3条		16	文選21。通鑑は「茅盈」	38
八23	967	4	18	通鑑は「張天師」	39
一一42	10他3条	8	15	後漢書57樂巴伝注	40

『神仙伝』対照表

※凡例

- 1 四庫本については、漢数字で巻数を示す。説字本については通し番号を記す。漢魏本では漢数字で巻数を、半角数字で通し番号を記す。
- 2 『三洞珠囊』については漢数字でその所在を、右の（ ）内の数字でもとの『神仙伝』における巻数を記す。
- 3 半角の（ ）内に記された数字は、同じ巻に数カ所の引用があることを示す。
- 4 芸文類聚、北堂書鈔、初学記、太平御覧、三洞群仙録については、半角数字で巻数を記す。
- 5 137番の范遹以降については、四庫本から雲笈七籤までは引用がないため、その部分については省略した。

	仙名	四庫本	説字本	漢魏本	三洞珠囊	北堂書鈔	芸文類聚	初学記	仙苑編珠	雲笈七籤
1	広成子	一	1	一1					(1/8) 莊子	1
2	若士	一	2		八(2)				1/9	2
3	沈文泰	一	3	十64					1/15	3
4	彭祖	一	4	一3	八(2)		78		1/7b	
5	白石生	一	5	二5			7		1/11b	
6	黄山君	一	6	十77				23	1/11a	
7	鳳綱	一	7	八47					1/44b	
8	皇初平	二	8	二6		160	94	29	1/44a	4
9	呂恭	二	9	六35					1/45a	
10	沈建	二	10	六36	一(5)				1/45b	5
11	華子期	二							1/46a	6
12	樂子長	二	11						1/46b	
13	衛叔卿	二	12	八48		5, 25		5, 25	1/47a	
14	魏伯陽	二	13	一4					1/47b	7
15	沈羲	三	14	八53	一(3)	133	83, 95	25	1/49a	8
16	陳安世	三	15	八54					1/49b	
17	李八百	三	16	二10					1/50a	9
18	李阿	三	17	二11		123			1/50b	10
19	王遠	三	18	二7	八(3)	145, 148	72	4, 26	2/17a	11, 卷85
20	伯山甫	三	19	二8					3/1	
21	墨子	四	20	八49					1/23b	
22	劉政	四	22	八55					1/23a	
23	孫博	四	21	八50	一(4)				1/24a	14
24	班孟	四	23	十86				21	1/24b	
25	玉子(張震)	四	24	八52					1/25b	15, 卷85
26	天門子(王綱)	四	25	八51					1/25a	16
27	九靈子(皇化)	四	26	十66					1/26a	
28	北極子(陰恒)	四	27	十67					1/26b	
29	絶洞子(李修)	四	28	十68					1/27b	
30	太陽子(離明)	四	29	十74	八(4)				1/27a	
31	太陽女(朱翼)	四	30		八(4)				1/28a	
32	太陰女(盧全)	四	31		八(4)				1/28b	
33	太玄女(顧和)	四	32	七38					1/29a	
34	南極子(柳融)	四	33	十69		135			1/29b	17
35	黃盧子(葛起)	四	34	十70	一(4)				2/9b	18
36	馬鳴生	五	35	二9					2/9a	
37	陰長生	五	36	四21		104			3/7b	
38	茅君	五	38	九56	一(9)		69	23	(2/18a) 扶真隱訣	
39	張道陵	五	37	四22			86		(2/24a) 正一經	19
40	樂巴	五	39	五26		77	2, 78, 80	2	3/7a	20, 卷85

太平広記	太平御覧	群仙録	神仙通鑑	その他	
八21	15他8条	8	5	文選22, 30, 31、水経注32。 漢魏本、広記、通鑑は「劉安」、七籤は「淮南王八公」	41
九24	724, 985	7, 12	6	＝漢武帝外伝	42
	394	1	21	＝漢武帝外伝。群仙録は「玉真」	43
			21	＝編珠	44
	759(2), 960		31	＝編珠	45
(六〇61) 女仙伝	387他3条				46
(六〇62) 女仙伝	927				47
九25	669, 845		15	＝編珠。説字本、漢魏本、御覧845、広記、通鑑は「孔元方」	48
九26	40, 839, 989		31	＝編珠。文選21、〔道学伝〕	49
	366		5		50
九27	477, 669, 849	1	15	＝魏略（『三国志』魏志11管寧伝裴注）	51
九28	693		34	＝『晋書』卷94孫登伝、〔魏氏春秋、文士伝、御覧502王隱晋書〕	52
	38, 747	3	34	＝漢武帝外伝。珠囊、編珠は「東郭延年」	53
	669	1	12	＝編珠。漢武外伝、水経注23	54
	669		12	＝漢武帝外伝。編珠は「婁景」	55
	679, 737, 871	6	12	＝編珠	56
	736			＝編珠	57
一〇36				＝抱朴子仙藥	58
			20	＝編珠	59
	811			＝編珠。列仙伝にも伝有り。	60
(七-64) 壬子年拾遺記			7	＝編珠	61
			12	＝編珠。説字本、漢魏本、通鑑は「清平吉」、編珠は「倩平」	62
	26		7	＝編珠	63
(五九59) 東仙録		2		＝抱朴子黃白所引桓譚新論	64
一二45	373, 901	6	20	＝漢武帝外伝。編珠は「刺子訓」	65
七一65	9他8条	11	23	太極葛仙公伝注。通鑑は「葛仙公」	66
一一43	187他13条		15	後漢書82下方術伝注	67
一〇37	581, 870	9	5		68
一一38			5	広記は無文	69
一一39	39, 737	6	12	漢魏本、類聚、初学記、御覧39、群仙録は「泰山老父」、 御覧707は「泰山父」	70
一一40		4	12	編珠は「剡子都」、群仙録は「巫談」	71
一〇31	71, 394, 662	15	12	文選38	72
一〇32	373, 662	7, 12	20		73
一二44	51他9条	8	20		74
一一350	812(2), 927		8	〔漢武帝外伝・七籤109太和真人伝〕	75
一一351	51他13条		15	三国志63呉範劉惔趙達伝注	76
一一46	41他4条	4, 9	16	三国志49士燮伝注	77
			12		78
一〇34	55, 965		15		79
一〇35	999		7		80
			12		81
	906			〔漢武帝外伝〕	82
	40, 989		12		83
	669他3条		21	〔漢武帝外伝〕、水経注2。漢魏本、通鑑は「封衡」	84
					85
	957, 987				86
					87

	仙名	四庫本	說手本	漢魏本	三洞珠囊	北堂書鈔	芸文類聚	初學記	仙苑編珠	雲笈七籤
41	淮南王	六	40	四20	八(6)	133	18, 85	10(2), 25	1/32	21
42	李少君	六	41	六30					2/26a	
43	王真	六	42	十84					3/6b	
44	陳長	六	43	十85	一(10)				2/35a	
45	劉綱	六	44						3/2a	
46	樊夫人	六	45	七42			86		3/2b	
47	東陵聖母	六	46	七45			91		3/3a	
48	孔元	六	47	六31	二(4)				3/3b	
49	王烈	六	48	六32			7, 78		3/4b	
50	涉正	六	49	十65					3/4a	13
51	焦先	六	50	六33	二(4)		80		3/5a	
52	孫登	六	51	六34	八(4)	109			3/5b	
53	東郭延	七	52	十88	八(10)				3/20b	
54	蓋壽光	七	53	十78					3/20a	
55	劉京	七	54	十75					2/31a	
56	嚴青	七	56	七43					2/31b	
57	帛和	七	55	七44		8, 24			2/33a	
58	趙瞿	七	57	三17	一(10)				2/33b	
59	宮嵩	七	58	十83					2/35b	
60	容成公	七	59					27	3/25b	
61	董仲君	七	63	十72					3/23a	卷85
62	倩平吉	七	64	十76					3/23b	卷85
63	王仲都	七	65	十73					3/24a	
64	程偉妻	七	66	七40			78		3/24b	卷85
65	蒯子訓	七	67	五29				15	3/8a	
66	葛玄	八	68	七46		137他二条	1, 87, 78	21	(2/23a) 靈寶經	
67	左慈	八	69	五27		123, 136	17, 89, 94	22, 26	1/20b	卷85
68	王遙	八	70	三18	一(8)	110, 136			1/19b	
69	陳永伯	八	71	十71					1/19a	
70	太山老父	八	72	五23		134	70	5	1/21a	
71	巫炎	八		五24				6	1/21b	
72	河上公	八		三12			78		(1/22) 葛仙公云	
73	劉根	八	73	三13	八(7)				3/10b	
74	壺公	九	74	五28		133, 148		30	3/9	
75	尹軌	九	75	九59					2/27b	
76	介象	九	76	九60	三(9)	103, 145	86, 90		1/20a	
77	董奉	十	77	六37	一(7)		7, 87		3/10a	
78	李根	十	78	十79	八(10)				2/30a	
79	李意期	十	79	三15		104, 157			3/21a	
80	王興	十	80	三16			81		3/21b	
81	黃敬	十	81	十80					2/34b	
82	魯女生	十	82	十90			95		3/29a	
83	甘始	十	83	十81			81		2/34a	
84	封君達	十	84	十92	一(10)		78		3/29b	
85	中黃子		60							
86	許由巢父		61						3/26b	
87	石陽		62							

太平広記	太平御覧	群仙録	神仙通鑑	その他	
一1	9他8条	6		水経注17、後漢書56張皓王襲伝注	88
一〇33	346, 605, 905			類聚, 御覧346は「李仲文」、書鈔は「李仲父」	89
一一47					90
一一41	39他4条	9		編珠は「婁憑」	91
(五九58) 女仙伝					92
六〇60	→王遠	11		編珠は題目のみ	93
一一三52	662	19	7	群仙録、通鑑は「蘇林」	94
一一三49	394			編珠、御覧は「孔安」	95
一一三53					96
一一三54		6	28	洞仙伝（『雲笈七籤』110）にも伝有り。	97
一一三55					98
			17		99
	662		12	御覧、通鑑は「黃子陽」	100
			7		101
	989				102
	958	3	20	洞仙伝（『雲笈七籤』111）にも伝有り。 類聚, 群仙録は「于君」、編珠は「于吉」	103
	957, 962				104
					105
	662				106
	967		6	編珠, 通鑑は「高丘子」	107
					108
	662			列仙伝の誤り。	109
					110
					111
					112
	988				113
					114
					115
			19		116
		8	19		117
					118
					119
					120
					121
					122
					123
					124
	989				125
		17		群仙録は「高丘子」	126
			6		127
	989			御覧は「白菟公」	128
	→王遠		5		129
五七56					130
	45				131
	344				132
	662				133
	662		17		134
	664		21		135
					136

	仙名	四庫本	說孚本	漢魏本	三洞珠囊	北堂書鈔	芸文類聚	初學記	仙苑編珠	雲笈七籤
88	老子			一2			19, 78, 86	1, 23(3)	(1/7a) 孔子曰	
89	李仲甫			三14		123	60		2/32b	
90	李常在			三19	一(9)				2/32a	
91	劉憑			五25					2/28b	
92	西河少女			七39						
93	麻姑	(三)		七42			8	6	2/22a	
94	蘇仙公			九57						
95	孔安国			九58					2/29	
96	成仙公			九61						
97	郭璞			九62						
98	尹思			九63						
99	平仲節			十82						
100	董子陽			十87						
101	戴孟			十89						
102	陳子皇			十91			81		2/30b	
103	干君				一(9)		89		2/24b	
104	桂君				一(9)				2/27a	
105	離婁公						89		3/30a	
106	玉女						74			
107	董威輦					160	78			
108	高丘公						78, 86		(2/40b) 真誥	
109	康風子						81			
110	蕭史						91			
111	大足								1/34a	
112	唐鳳								1/34b	
113	黑容公								1/35a	
114	養門子								1/35b	
115	長陵三老								1/36a	
116	商山四皓								1/36b	
117	王長								2/25a	
118	趙昇								2/25b	
119	肯來子								2/41a	
120	洛下公								2/41b	
121	張常								2/42a	
122	飛孟子								2/42b	
123	婁元綱								3/25a	
124	桑子林・張虛								3/26a	
125	郝容公								3/27a	
126	秀眉公								3/27b	
127	商丘公								3/28a	
128	青烏公								3/28b	
129	白兔公								3/30b	
130	蔡經	(三)								12
131	太真夫人									
132	白仲理									
133	上元夫人									
134	王生									
135	吳睦									
136	鮑靚									

	仙名	太平広記	太平御覧	群仙録	神仙通鑑	その他
137	范邈		669			
138	飛黄子		857			
139	雲仙翁		960			
140	劉元鳳		985			
141	張虚		986			
142	黒穴公		991			
143	竇遷			1		
144	青精先生			2		
145	馬湘			3, 7	36	続仙伝の誤り
146	西王母			3		
147	何何尊師			4	32	通鑑は「何尊師」
148	陳休			4		
149	王喬			4	3	列仙伝〔王子喬〕の誤り
150	呂尚			4	3	列仙伝の誤り
151	司馬承禎			4, 11	25	続仙伝の誤り
152	聶紹元			5	42	
153	徐定辞			5		
154	維陽十友			5		
155	懷子			6	3	列仙伝の誤り
156	陳搏			7	47	
157	狂士			8		
158	王老			8	36	
159	劉平阿			8		
160	陳希夷			10		
161	曹德休			10	31	続仙伝の誤り
162	施存真人 (存胡先生)			10		
163	灰袋			10	43	通鑑は「佯狂道士」
164	尹道全			10	33	
165	葛洪			10, 14	24	
166	王徽			11		
167	蕭文常			11		
168	劉農阮肇			12		
169	黄尊師			12		
170	擊竹子			13		
171	韋節 (華陽子)			13		
172	譚紫霄			15		
173	羿			15		
174	桓闍			15	28	
175	介子推			15	3	列仙伝の誤り
176	劉商			16	38	続仙伝の誤り
177	田宣			17		
178	服闍			17	3	列仙伝の誤り。通鑑は「服闍子」
179	浮丘公			18	4	
180	古元之			18		
181	赤須子			18	3	列仙伝の誤り
182	王処士			19		
183	毛女			18		列仙伝の誤り

されたものと言える。葛洪の記した原本『神仙伝』の配列はほとんど不明だが、四庫本の配列がその旧本の配列に即したものである可能性は高い。

次に、一覧表を作成した結果、気付く点について述べていく。

まず第一に、四庫本と説字本の条配列がほぼ同じである。両本ともに八四人の神仙の伝を立てる点では全く同じで（漢魏本では九二人）、相違点としては、四庫本には華子期、巫炎、河上公の伝があつて説字本にはなく、説字本には中黄子、許由巢父、石陽の伝があつて四庫本にはない。また、劉政と孫博、茅君と張道陵、嚴青と帛和の三箇所ほど順序が逆になっている。説字本の配列について、小南一郎氏は、『雲笈七籤』卷一〇九との比較結果などから、説字本の配列は古い形を伝えている、と説く。⁽⁶⁾ 同氏はその際、『七籤』に見えて説字本に見えない伝（華子期）があることを指摘しているが、四庫本では全ての伝が存在している。説字本と同じ問題点を抱えている場合もあるが、説字本に比べ、四庫本は、わずかではあるが『七籤』⁽⁸⁾ 当时に存在した『神仙伝』の姿により近いことを示しているのではなからうか。⁽⁷⁾

第二に、『三洞珠囊』所引の『神仙伝』の条に記される巻数と四庫本との一致率が、漢魏本の場合に比べて高い。『三洞珠囊』（以下『珠囊』）に引かれる全二八条のうち、四庫本では沈羲、王遠、孫博、太陽子、太陽女、太陰女、黄盧子、張道陵、淮南王（八公）、王遠、介象、李根、封君達の二三条の巻数が一致する。これに対し、漢魏本では茅君、封君達、陳長、介象、李根、東郭延年のわずか六条である。⁽⁸⁾ また、『珠囊』に引かれる神仙のうち、漢魏本には干君、桂君、若士（『珠囊』では「若土」）、太陽女、太陰女が見えないが、四庫本ではこのう

ち若士、太陽女、太陰女が見える。ただ、四庫本では漢魏本に見える麻姑と李常在が見えない。麻姑伝については、前述のごとく、本来ならばありえない重複である。付け加えるならば、麻姑の条は、『珠囊』は王遠伝と同じ『神仙伝』の「第三」から引かれている。『珠囊』の引く『神仙伝』の条は題目が記されているのではなく、内容が一部引かれるのみである。条の冒頭に麻姑の名が記されているからといって、『珠囊』当時、王遠伝から独立した麻姑伝が存在していたかは大いに疑わしい。『珠囊』の麻姑の条は、王遠伝から引かれたと考えて間違いないだろう。むしろ漢魏本の麻姑伝については、『珠囊』に引かれた条を見て、後世の漢魏本作成者ないしは改訂者が、独立した麻姑の伝があると安易に考えた結果、王遠伝の内容を考慮せずに同文を別個の伝として立てたという疑いが強い。よって麻姑伝はこの場合問題としない。

ここから、漢魏本に比べて四庫本は『珠囊』の拠った『神仙伝』、即ち盛唐以前に存在した『神仙伝』との一致率がやや高いと言える。つまり、配列のみからの推測ではあるが、四庫本の方が漢魏本よりも幾分か古い形を伝えていると考えられる。ただし、『珠囊』の記す巻数と一致しない条は四庫本でも半分以上あるし、前述したように李常在は漢魏本にあつて四庫本にはない。このため、四庫本が唐以前の『神仙伝』の形を完全に残しているとは決して言えない。

第三に、四庫本と『仙苑編珠』とは密接な関係にある。『仙苑編珠』（以下『編珠』）は唐末五代の道士王松年によつて編纂された書物であるが、『蒙求』のごとき形式に従い、二人一組の対句形式の韻文で記される仙人達の注として、多数の『神仙伝』の条を引いている。四庫本の八四人のうち、『神仙伝』の条として引かれるのは七九人で、他書からの引用として登場している五人（広成子、茅君、張道陵、葛玄、河上公）を含めると、四庫

本にある全ての仙伝が『編珠』にあることになる。次に、四庫本の仙伝の配列と『編珠』のそれとを比較すると、『編珠』で対句を構成している二人の仙人は、四庫本でも隣り合っていることが多い。先の七九人（うち若士、沈文泰、伯山甫、淮南王、壺公の五人は一人の伝で対句を構成する）のうち、四庫本でも隣り合っている仙人が二八組五六人もあるのである。⁽¹⁰⁾さらに、『編珠』に引用される仙伝は、四庫本の巻一から巻四までは概ね巻上に収録され、後半になるほど乱れてはいるが、以降に巻中・巻下の仙伝が並ぶ。これらの点から、唐末において王松年が見ることのできた『神仙伝』は、説字本でも漢魏本でもなく、四庫本に最も近いものであったということができよう。

ただし、現在の四庫本が『編珠』当時のものと同じであると早急には言えない。『編珠』には説字本や漢魏本にしか見えない仙伝があり、さらに大足、唐鳳など、現在のどの『神仙伝』にも見えない神仙の伝が一六もある。王松年の序によれば、当時彼の見ることのできた『神仙伝』は一一七人の神仙を載せていたという。ここから、当時の『神仙伝』は現在の四庫本に最も近いとはいえず、説字本や漢魏本をも包摂したより内容の豊富な書物であったようだ。先の一六人は、現在の『神仙伝』成立までに亡んだ伝の一部なのであろう。見方を変えれば、神仙の題目に関する限り、現在の三種の版本はいずれも唐代の『神仙伝』の一部を残している可能性が高いとも言える。

第四に、『太平広記』と漢魏本及び四庫本との関係である。『四庫提要』でも指摘されるように、漢魏本は『太平広記』（以下『広記』）からの輯本と呼んでも差し支えないほど、その配列・内容両面における一致率が高い。しかし、例えば『広記』巻七は漢魏本巻二、『広記』巻八は漢魏本巻五、『広記』巻九は漢魏本巻六、『広記』巻

一〇は漢魏本卷三、『広記』卷一三は漢魏本卷九というように、漢魏本の巻配列と『広記』のそれとの間にはあまり関連性が見えない。これに対し、四庫本における条の配列と『太平広記』所収『神仙伝』のそれには、若干ではあるが関連性が見いだせる。四庫本の順序で『広記』を見ていくと、四庫本の巻六あたりまでは『広記』の巻数が一桁のものがほとんどであり、後半になるにつれて『広記』の巻数は二桁へとなっていく。四庫本『神仙伝』と『広記』とは、仙人の数や内容の面で大いに異なり、四庫本成立の際に『広記』が参考とされたとは考えにくい。ならば、『広記』編纂時に参照された『神仙伝』の条配列が、四庫本のそれと共通する部分を多く含んでいたという可能性が考えられる。

第五に、唐代の類書に見える『神仙伝』の条の中に、現存する三種のどの『神仙伝』にも見えないものがある。『珠囊』に見えた千君は『芸文類聚』や『編珠』、さらには宋代の『太平御覧』や『三洞群仙録』にも見え、桂君は『珠囊』と『編珠』に見える。孫引きの可能性を考え併せても、六朝末期から唐代にかけて両伝が『神仙伝』として存在したと考えるてもよからうが、これらは現在どの『神仙伝』にも見えない。他にも、『列仙伝』の誤りであるものを除けば、五人ほど『芸文類聚』等に見えて現在は欠けている伝がある。また、漢魏本に見えて四庫本（及び説字本）に見えない伝が一五条ほどあるが、王遠伝の一部である麻姑を除けば、唐代の類書にはそのうち老子・李仲甫・李常在・陳子皇の四条が見える。特に老子は『芸文類聚』や『初学記』、宋代の『広記』や『御覧』等に頻繁に見え、唐代にはよく知られた条であつたらしい。これらの諸条が見えないということは、漢魏本は勿論のこと、四庫本も、六朝及び唐代にあつた『神仙伝』がそのままの形で伝わったものではないと言える。

第六に、南宋代になると三種の『神仙伝』いずれにも見えない神仙の伝が急激に多くなる。今本に見えない伝は、五代の『編珠』で一八条、宋初の『太平御覧』では一四条ほどで、互いにほとんど共通しない。これが南宋代の『三洞群仙録』になると四四条にもなる。条数が多いのみではない。この四四条のうちには、『列仙伝』の誤りである呂尚や犢子、『続仙伝』の誤りである司馬承禎や曹德休など、他書の引用の誤りだと分かるものもあるが、唐代の道士が多数含まれるのに加え、『神仙伝』の編者である葛洪自身の伝まであり、後世に増補されたものであることは疑いが無い。葛洪の伝があるところから考えると、南宋代には『神仙伝』が葛洪の撰であることが分からなくなっていたか、あるいは同名の異書が存在して、従来の『神仙伝』と混淆してしまったかのどちらかであろう。しばらく正史の目録に見えず、民間に流布した形で伝わったと思われる『神仙伝』のような書物は特に、後世になればなるほど増補によって内容が増えていくものである。しかし、現在の漢魏本及び四庫本には『三洞群仙録』のような混乱はほとんど見受けられない。⁽¹⁾ここから、両版本は、成書年代の確定は困難であるが、少なくとも北宋以前の類書を参考にしていること、また、北宋時期において『神仙伝』に大きな変化が起きたことが推測できる。

三

神仙の配列から言えることをまとめる。四庫本と説字本は、小南氏が推定したようにその源流が同じで、神仙の題目と簡単な紹介のみを抜き出したのが説字本だと言えよう。三種の版本はいずれも唐代の形をそのまま残し

てはいない一方で、『編珠』に見えるように、それぞれが唐代の『神仙伝』の一部を反映している。その点で、各本ともそれぞれに何らかの価値を見出すことができよう。また、漢魏本が『広記』からの単純な抜き出しに巻一〇の各伝を付随させただけと言ってもよいものであり、秩序に欠けた輯本であるのとは対照的に、四庫本は、輯本ではあるが、類書からむやみやたらにかき集めてきたような性格のものではなく、ある一定の基準のもとに八四人を選び出して一〇巻に構成された書物であると考えられる。その基準とは、葛洪の記した『神仙伝』の条と考えて大過ない伝であること、また、葛洪が考えたであろう配列に従って伝が並ぶことである。即ち、各類書をもとに、六朝末から唐代の『神仙伝』を一部再現しようという試みがなされたようだ。この点で、『四庫提要弁証』において余嘉錫が、四庫本と漢魏本の両者とも輯本であると述べつつ、四庫本について「用心較為周密耳」と評しているのは当を得ていると言えよう。

配列の面から諸本『神仙伝』の性格を論じてきたが、配列という外見において、様々な本に見える『神仙伝』の条を取捨選択し、六朝末から唐代の『神仙伝』を復元しようという意欲が見える以上、内容面においても、なるべくその当時の形を保持・復元しようとの意欲が期待される。つまり毛晋刊本が、毛晋の勝手な意図によつて内容が改竄・歪曲されて編纂されたものである可能性は低く、その点で、葛洪の著した原文にまで遡るのは困難であるとしても、六朝末頃の姿を留めている可能性は期待できよう。四庫本『神仙伝』は、配列面のみならず、内容面においても漢魏本と際違った相違点がある。内容の検討を詳細に行わねば、三種の『神仙伝』の性格や資料的価値を定めるために不十分であることは間違いない。この作業については別稿にゆずり、改めて論じたい。

注

- (1) 「神仙伝考」(東方宗教一)、「神仙伝続考」(宗教研究一三七)、『神仙伝』解説(中国古典新書、明德出版社 一九八三)。
- (2) 漢魏本の内容については下見隆雄「葛洪『神仙伝』について(一)・(二)」(福岡女子短大紀要八・九)、『薊子訓の伝記』(広島大学文学部紀要三八―一)、『神仙伝』について―『後漢書』方術伝との相違、左慈・劉根の場合』(広島大学文学部紀要三九)、手塚好幸「費長房説話と『神仙伝』」(漢文学会々報三〇)等の研究があり、説字本の配列に関しては、小南一郎「神仙伝の復元」(入矢・小川両教授退休記念中国文学語学論集、一九七四)等がある。なお、つい最近、土屋昌明氏の「四庫本『神僊伝』の性格及び構成要素―特に「陰長生傳」をめぐって―」(東方宗教八七)によって、四庫本の内容に関しての検討がなされている。
- (3) テキストとして、漢魏本は『増訂漢魏叢書』所収本、説字本は商務印書館本、四庫本は『諸子百家叢書』(上海古籍出版社)所収本を用いる。なお、四庫本については、『四庫全書』が毛晋刊本を収めた際に、どれだけ正確かつ網羅的に引いてきたか、などという問題もあろう。四庫本は現任見ることのできる唯一の毛晋刊本であり、判断のしようがないのであるが、『四庫全書』の他の書物の場合を鑑みて、多少問題があったとしても、大過のないものと考えらる。よってここでは四庫本を毛晋刊本として扱うこととする。
- (4) 「葛洪『神仙伝』について(一)」(注2参照)。
- (5) 黄山君伝は四庫本にもあり、漢魏本と同文である。しかし、四庫本の巻一彭祖伝の末尾には黄山君の話は載っていない。重複してはいない。
- (6) 「神仙伝の復元」(注2参照)。

(7) 漢魏本については福井氏の前掲論文(注1参照)に詳しい。

(8) 四庫本の配列が古い形態を留めていることは、同氏も「尋彙から存思へ―神仙思想と道教信仰の間―」(吉川忠夫編『中国古道教史研究』、同朋舎、一九九二)の注一で述べている。なお、氏は注2の論文において、『七籤』所収の『神仙伝』が、巻七以下の失われた不完全なテキストの抜粋であった」と述べているが、『七籤』巻八五尸解部にも『神仙伝』よりの抜粋と思われるものが、玉子、倩平吉、董仲君、王方平(遠)、樂巴、女真程偉妻、左慈(記載順)の七条ほどあり、四庫本でいうと巻七及び巻八のものも含まれる。玉子、王遠、樂巴に関しては巻一〇九と重複しているが、その内容は同じであるため、同一の版本から抜粋したと考えられる。故に、当時見ることできた『神仙伝』が巻六までのものだったとは言えまい。

(9) 四庫本以外ではどうかというと、説字本にのみある三人の伝のうち、二人は『編珠』に見えない。また、漢魏本にのみある一五人の伝のうち、九人は『編珠』には見えない。

(10) 四庫本巻一〇の黄敬・魯女生・甘始・封君達においては、黄敬と甘始、魯女生と封君達がそれぞれ対句を構成している。当時王松年が見ていた『神仙伝』では魯女生と甘始の順番が逆だった可能性もある。

(11) 葛洪と同時代の人物である郭璞が漢魏本に載っているなど、混乱が完全にないとは言いが切れないが、ここでは触れない。